清泉女子大学人文科学研究所紀要 第35号 2014年3月

前置詞の多義性への一考察

遠　藤　雪　枝

要旨　空間前置詞はその多義性ゆえに、空間的意味を記述することは容易ではない。また前置詞の使い方に四苦八苦している学習者も少なくない。本稿では、学習者の前置詞に対する理解度の調査結果を提示し、それを踏まえた学習法を考察する。

キーワード：前置詞の多義性、コア理論、コア図式

A Study of Polysemy of Prepositions

ENDO Yukie

Abstract　As a preposition is polysemous and respects the intricacy and seeming capriciousness of its behavior and yet accounts for the meaning of complex locative expressions, it is not easy to describe every meaning of a preposition. In this article I present a questionnaire on the preposition (over/above), its results, and findings of my analysis.

***Keywords*:** polysemy of preposition, core theory, diagram of core theory

1. はじめに

英語において前置詞の多くは、本質的意味として空間的性質を持ち、事物の空間関係を表現するために不可欠な言語要素であるが、その多義性ゆえに前置詞の使い方に四苦八苦している学習者は少なくない。従来の英語教育では、前置詞は単なる暗記の対象とされ、前置詞を系統的に扱うことはないため、前置詞が出てくる度にその用法を丸暗記し、それらの中から前置詞に対するイメージを学習者自身で感覚的に作りあげている場合が多い。本稿では、学習者の前置詞に対する理解度の調査結果を提示し、それを踏まえた学習法を考察したい。

2. 先行研究

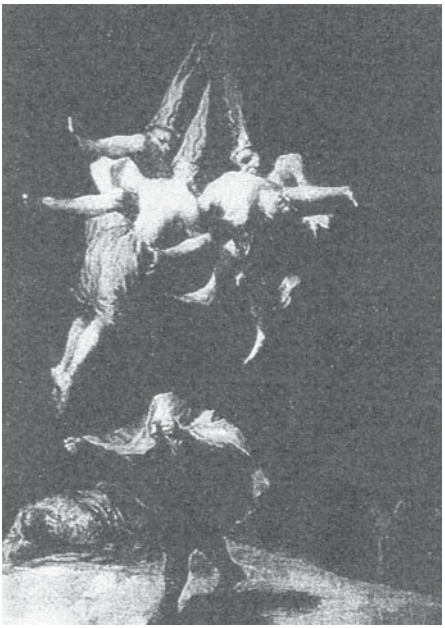
前置詞の空間的意味を記述するために、二つの立場がある。一つは、構造主義的立場であり、もう一つは認知意味論的立場である。前者は、前置詞の意味は有限個の意義素に分析することができ、複数の用例の中に見出される中核的な意味をその意義素の束として抽出することができるという考え方であり、一つの語には一つの意味があるという仮定に立って、意義素を使って前置詞の中核的意味を記述する。Bennet（1975）、Ruhl（1989）らに代表される。後者は、プロトタイプ理論（prototype theory）に基づき、前置詞の持つ複数の意味全体を一つのカテゴリーと捉え、そのカテゴリーを構成する個々の要素間の関係をイメージ・スキーマ（image schema）のネットワークとして捉える。慣習化（conventionalization）や認知的際立ち（cognitive salience）の程度の高いものをプロトタイプ的意味とし、そのほかの意味との関係をメタファーなどの認知能力と関連づけようとする立場である。複数のイメージ・スキーマを打ち立て、その中のある特定のイメージ・スキーマを中核とし、そこからの拡張として前置詞の意味の多義性を説明していく。Brugman（1981）、Lakoff（1987）、Langacker（1987）、Taylor（1995）らに代表される。

しかしながら、いずれも、それぞれの前置詞の意味を全て抽出し記述するのに明確な答えを持っているわけではない。前置詞の多義性を十分に説明しきれていないのだ。本稿では、前置詞の空間的意味を説明するために、（田中1990；1997）が提唱するコア理論（core theory）を採り入れる。

3. 調査方法とその結果

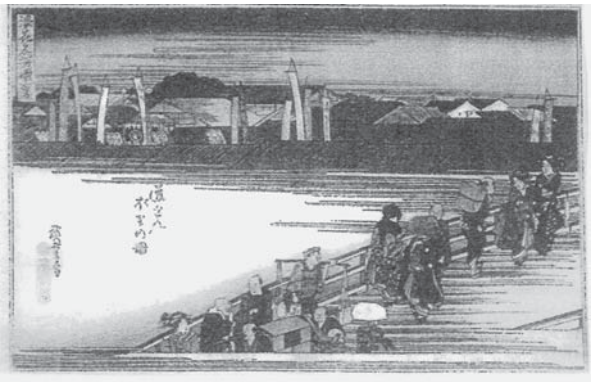
学習者の前置詞に対する理解度を調査するために、事物の空間関係を表現しているカラー写真とその状況を表す英文を提示し、適切だと思われる前置詞を入れてもらった。調査対象は、M大学英文科3年生32名。結果は以下の通りである（数字は回答者数を表す。複数回答有）。①～⑧にはoverが、⑨～⑬にはaboveが本来は入る。ただし、⑦はaboveの方が適切である。多くの前置詞の中からoverを選んだ理由は、overは多義性が高いとされているからであり、aboveはoverと類似する前置詞だからである。

1）The man with the cloth (①) his head is making a sign with his hands to ward off evil spirits.



on	over	above	up
15	14	1	1

2) Hiroshige depicts the bridge (②) the Doton Canal as a diagonal across the picture.



across	over	of	at	on	in	for
13	8	6	1	1	1	1

3）Title: Autumn Moon (③) the Yoshiwara Quarter
The man has stopped beneath a weeping willow in order to look back (④) the roofs of Yoshiwara.

③

over	above	in	at	of	on	from	as
17	5	3	2	2	1	1	1

④

at	above	on	to	over	from	near
13	6	6	4	1	1	1

4) The two travelers at the top left looked (⑤) the abyss.

at	across	for	down	on	into	over	of
10	9	4	3	2	2	1	1

5) Jesus and God hold a crown of roses (⑥) her head and the Holy Spirit hovers (⑦) her.

⑥

over	above	on	in
15	15	1	1

⑦

over	above	on	under	behind	with	of
14	8	3	2	2	2	1

6) The V shapes of the wallpaper's design are mirrored in the white cloth napkin draped (⑧) the edge of the chest.

on	over	in	with	down	around	at	from	across	off
13	9	2	2	1	1	1	1	1	1

7) The model boat perched (⑨) the bed.

above	over	on	in	up	under	behind
16	6	6	1	1	1	1

8) Gilt-framed prints hanging (⑩) an antique English writing desk.

above	on	over	in	out	with
17	8	4	1	1	1

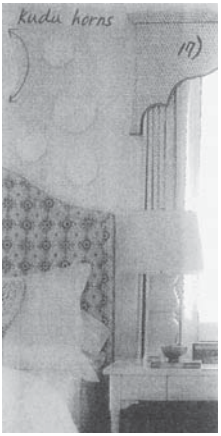
9) By capturing and reflecting the natural light, it seems to lift the eight-foot ceiling high (⑪) the room.

in	from	to	up	of	above	over	on	within	未記入
10	6	3	2	2	1	1	1	1	5

10）The walls (⑫) the breakfast table are hung with many postcards.

around	behind	by	above	over	along	at	beside	on	with
20	3	2	1	1	1	1	1	1	1

11）I hung an arrangement of kudu horns and ivory creamware plates (⑬) the bed.



above	over	around	up	on	beside	next to
19	7	2	1	1	1	1

①ではonを使った学生の方が多かった。overの「覆う」という語義が定着していないのかもしれない。④では、柳の下にいる男性は、吉原の屋根を見ているのではなく、屋根“越し”に月を見ているのだが、そのような状況を表現するoverが思いつかなったのか、写真をよく見ていなかったのかのどちらかなのかはわからない。⑤では、写真左上にいる二人が眼下の深い穴を見ているのだが、深い穴の範囲が広いため、一点を見るatではなく、深い穴を見“渡す”ことを表現するoverが適切なのだが、overを使った学生は一名しかいなかった。⑧では、白いテーブルクロスは棚の上にかかっていて、その一部が下に垂れているのだが、棚の上だけを表現するonを使った学生の方が多かった。これもまた、overの“覆う”という語義に対する意識の薄さを露呈しているのかもしれない。

4. コア分析

4.1 従来のコア分析

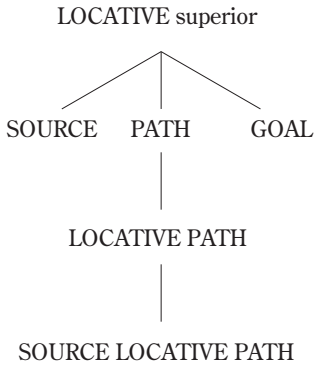
従来のコア分析は、構造主義的立場を基盤とし、語には意味がありその意味を構造化しようとしていたので、語の意味成分を階層構造で示していた。例えば、Bennett（1975）は、overの多義性を以下のように分析している。

① My hand is <u>over</u> the table.
② I removed the lamp from <u>over</u> the table.
③ Please put the lamp <u>over</u> the counter.（カウンター越しに）
④ Please put the lamp <u>over</u> the counter.（カウンターの向こうに）
⑤ The post office is <u>over</u> the hill.
⑥ A car appeared from <u>over</u> the hill.

① ［LOCATIVE［superior of table］place］
② ［SOURCE［LOCATIVE［superior of table］place］］
③ ［PATH［LOCATIVE［superior of counter］place］］
④ ［GOAL［LOCATIVE［superior of counter］place］］
⑤ ［LOCATIVE［PATH［LOCATIVE［superior of hill］place］］

⑥ ［SOURCE［LOCATIVE［PATH［LOCATIVE［superior of hill］place］place］］

つまり、［LOCATIVE superior］によって記述される①がoverの基本的語義とされ、以下この基本的語義にSOURCE、PATH、GOALという意味成分が加えられていく。この構造を図で表すと以下のようになる。

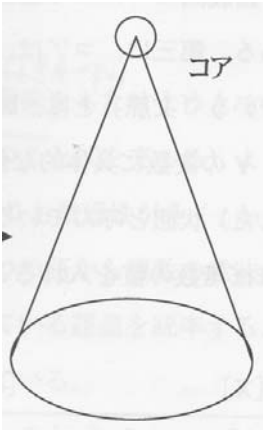


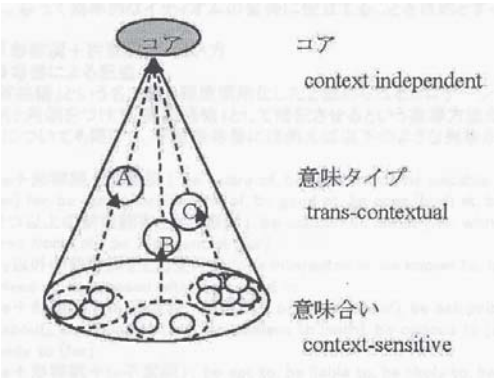
この階層構造に関し、田中（1990）は、2つの問題点を指摘している。まず第一に、SOURCE、PATH、GOALはoverの直接的意味成分であるのかどうか疑問であると言う。②の例文では、SOURCEはoverの直前にある他の前置詞fromからきている。また、③と④のPATHとGOALは、動詞putとの関係性からきているものであって、これらはoverの直接的意味成分として分析することはできない。第二の問題点は、この階層構造ではoverの全ての用法を網羅できないという。例えば、The ball rolled over. のように、「回転」を意味する事例が加われば、基本的語義である［LOCATIVE superior］は維持できなくなる。

4.2　田中（1996）が提唱するコア理論

認知意味論の分野でのコア理論（田中1987，1990，1997）とは、①習得面では、人は一般に、言語を使用してやり取りを行う中で、常に言葉に対して意味づけを行いながら心的表象として概念を立ち上げる。そして、さまざまな文脈の中で繰り返し同じ語を経験する中で、概念の一般化を行いながら、概念を形成していく（差異化、一般化、典型化作用）。この概念形成の過程の中で、まずは文脈の捨象を行いながら、文脈横断的な（trans-contextual）意味の一般化を行う。これが「意味タイプ」と言われるものである。そして、さらに意味の

一般化が進むところまで進んだ結果、コアを獲得する。この「コア」とは、「文脈に依存しない意味（context-free or context-independent）」を指し、「コア・ミーニング（core meaning）」と呼ばれる。ただし、コアは、言語使用者にとって、通常は意識されない。そして、②実際の言語の使用場面においては、この文脈に依存しないコアが文脈調整を経て、文脈に依存した「意味合い（context-sensitive）」を得る、という考え方である。そこには意味論分析による意味構造の説明は不在である。以下は、田中が提唱するコア理論を円錐図で示したものである。コアとは、円錐の頂点にあるものとイメージされ、語の意味全体をつかさどる概念として表されている。円錐形の底辺の大きさは意味の範囲を示しており、円が大きくなればなるほど、コアの頂点も高くなり、コアの抽象度が増す。

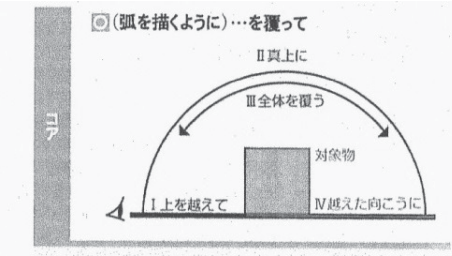




4.3　田中（1996）が提唱するコア図式

田中（1996）は、overの多義的用法は、焦点化という概念を導入し、イメージ図である「コア図式」を使えば上手く説明できると言う。焦点化とは、コア図式の「図」の部分を前景化し、他の部分を「地」として後景化することである。例えば、overのコア図式は以下のようになる。

① The cat jumped <u>over</u> the fence.　　Iを焦点化
② The plane is flying <u>over</u> the Pacific Ocean.　　IIを焦点化
③ There is a castle <u>over</u> the mountain.　　IVを焦点化
④ The king had strong control <u>over</u> his people.　IIIを焦点化



I　上を越えて [前]
- …を越えて ▷ ❶
- …からあふれて ▷ ❷
- (基準)を越えて ▷ ❸
- …をめぐって ▷ ❹❺
- …しながら ▷ ❻❼

II　真上に[を] [前]
- …の真上に[を] ▷ ❽

III　全体を覆う [前]
- …を覆って ▷ ❾
- …を支配下に置いて ▷ ❿

IV　越えた向こうに [前]
- …の向こうに ▷ ⓫
- …を乗り越えて ▷ ⓬

この図式のIIIを使えば、上記3の調査例文内①に入る適切な前置詞はonでなくoverであることがわかる。同様に、②にはIを適用し、③にはIIを、④にはIVを、⑤にはIIIを適用すれば、迷うことなくoverを入れることができるだろう。⑤では、二人の旅人の深い穴に対する目線が弧を描くように動いていると思えばよい。⑥ではIIを、⑧ではIIIを適用すればよい。⑨～⑬への適切な前置詞はaboveであり、aboveには「～の上に」という語義があるが、そこでは「真上に」という意味合いが強く、その上下の落差が重要となる。

5. おわりに

英語教育へのコア図式の応用は、前置詞の使い方に関して、学習者が語義や語義の中の詳細な細分化された意味を暗記していなくても前置詞の意味をイメージとして感覚的に捉えることができるために、どのような文脈においても前置詞本来の意味が理解できるであろう。また、学習が十分に進んでいない学習者の場合には、前置詞の意味を直観的に推測することができるであろう。今後、学習者へのコア図式応用に関して、実験群/統制群に分け実験をし、その効用を調査したい。

参考文献

阿部純一・桃内佳雄他. 1994.『人間の言語情報処理―言語理解の認知科学』サイエンス社.

Aitchison, J. 2003. *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*. Blackwell Publishing Ltd.（宮谷真人・酒井弘監訳. 2010.『心のなかの言葉』培風館.）

Bennett, C. 1975. *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions-An Essay in*

Stratificational Semantics. Longman.
Brugman, C. 1981. *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. Garland Publishing Inc.
Croft, W. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. U. of Chicago Press.
遠藤雪枝．1993.「心象現象から見た前置詞」『研究紀要』第2号．言語文化研究会．pp. 59–68.
遠藤雪枝．2008.「onかinか？―可塑性がある対象物に関わる空間前置詞の選択」．日英言語文化研究会編『日英の言語・文化・教育―多様な視座を求めて』三修社．pp. 126–135.
Evans, V. & Paul C. 2010. *Language, Cognition and Space*. Equinox Publishing Ltd.
E-GATE英和辞典．2003．ベネッセコーポレーション
Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces*. C.U.P.
今井むつみ．2010．岩波親書1278『ことばと思考』岩波書店.
Lakoff, G. 1987. *Woman, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago University Press.
Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar I: Theoretical Prerequisites*. Stanford U.P.
Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. O.U.P.（宮浦国江〔訳〕．2006.『実例で学ぶ認知言語学』大修館書店.）
Lindstromberg, S. 2010. *English Prepositons Explained*. John Benjamins Publishing Company.
松本曜・田中茂範（中右実編）．1997．日英比較選書6『空間と移動の表現』研究社.
松本曜（編著）．2004．シリーズ認知言語学入門　第3巻『認知意味論』大修館書店.
The Oxford English Dictionary (Second Edition). 1989. Clarendon Press.
大堀壽夫．2002.『認知言語学』東京大学出版会.
Ruhl, C. 1989. *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. State University of New York Press.
田中茂範（編著）．1987.『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』三友社出版
――― 1990.『認知意味論―英語動詞の多義の構造』三友社
Taylor, J. R. 1989. *Linguistic Categorization–Prototypes in Linguistic Theory*. Clarendon Press.